

スマトラ行き (1)

I—M 生

お断り 観測の方面の事は、別項で發表される事と思ふので、六ヶ敷い事柄は一切抜きにして、此處では單なる記行文と云ふ事にし、面白かつた事や困つた事などを、惘然と筆にまかせて書きなぐる考へてですから、そのおつもりで、讀んで頂き度いのです。

○ 新城總長や石野理學部長、天文臺の皆様の大御見送り裡に、京都驛を出發したのは、三月二十四日の朝であつた。神戸では、今度のスマトラ行きに、始めから御世話下さつた本會會員奥村幸二郎氏を始め、天文臺の數氏並びに會員數氏の御見送りの内に、同日午後二時、吾等の乗つた商船の貨客船たこま丸は出帆した。

○ 門司で船が止まるに、直ちに石炭船が澤山寄つて來て、早速石炭積込みが始まつた。なかなか景氣のよいものである。暫らく見されてゐたら、あまり景氣がよすぎて、人間が一人石炭と一緒に、起重機で引上げられて了つたのには驚いた。倒になつて空中に吊り下げられた時は、さうなる事かこ心配したが、案外あつさりに、甲板上に下ろされたので、先づは安心。

それから雨を衝いて、下關に上陸し、同地の會員諸氏に迎へられて、山陽ホテルで晚餐の御馳走になる。此處から自動車に分乘して、本會下關支部主催の講演場たる梅光女學院へ向ふ。折り柄の雨にも拘はらず、聽講者は多數。先づ山本先生が、本年5月9日の日食に就いて、續いて中村氏が日食觀測法に就いて述べられた。次に上島氏が太陽上層ガスと日食との關係を述べられる筈、所が同氏は再三之を斷はられたので、聽衆はなかなか承知せず、拍手で迎へるので、さうさう否應なしに演壇に引張り出される。けだし、此れが同氏の處女講演なのである。所が、口を開いたら、さうして處女講演きころではない。洒落が飛び、比喩が續いて、六ヶ敷い内容を面白可笑しく、滔々述べられたので、すつかり人氣を一人で引受けて了つた。最後に幻燈を映寫して、山本先生が説明され、大喝采裡に會を閉ぢたのが、3月25日午後10時。

此の夜は、會員河村、廣津兩氏の御好意で兩氏の御宅に分宿して、日本の陸地での最後の夜を過した。

○ 航海中、船で「うねり」は強いが寝込む者はない。尤も私は玄海灘さ云ふ名前ですつかり酔はされたが、此の灘を通り過ぎてからは、搖れ方は同じなのだが、元氣を取りもさして、輪投げや繩飛び、麻雀等で日を暮らしてゐる。一日に一回又は二回、船の無線受信機で報時を聞かせてもらうのが日課。航海は至つて退屈である。時たま馬來語の稽古、サト、ドア、テガミ餘念がない。門司を出帆した翌28日に、船の時計は37分遅らされた。何んだか變な氣持がするものだ。更に翌日は14分、30日には9分遅らせて結局西部標準時となる。で、さう考へても1時間丈餘分に壽命が延びた様に思はれて仕方がない。

31日には朝からジャンクが澤山見える。船は今、福建省の沖を進んでゐる。西方遙か10里の外に、雲か山か、かすかな影を認める。その手前に、松林の様に竝んだのがジャンクである。とても大した數だ。どれもこれも一様に、帆の恰好が妙で、且つ色が悪い。「沖の白帆」ぢやなくて、「沖の褐色帆」では、映えない事おびたしい。

○ 四月一日朝、フト眼を覺ますと船は止まつてゐる。驚いて甲板に出て見ると、久し振りに雲間から星が、所どころに見える。南方には「さそり」の一部が見え、北斗は思つたより未だ高い。

船は今、四方を島で取り巻かれた、浪靜かな灣に停止してゐる。島と島との間からは、漁船の怪火が明滅する。北西の空が、ほのかに白んでゐるのは香港でもあらうか。日出までには未だ間もあるので、再びベットに入る。……愈々香港の對岸、九龍の棧橋に横附けさなつたのが、午前9時。今や香港の島は夏の始め。全島は若葉に包まれ、その青い葉蔭には赤や黄色の家々が、800尺の頂上まで點在して、平和な、落ち付いた感じを與へる。此の調和を破つて、灣口に向つて素晴しく大きな大砲が、「大英帝國の威嚴は斯くの如し」さばかりに、山の峰々に頑張つてゐる。あそこで聞いた話だが、此れは皆な木製の大砲で、本物は見えない所にかくしてあるんだそうさ、おつかないおつかない。

三井物産の井上氏の御案内で、自動車で島を一週する。名も知れぬ草木の間に松だけは懐かしく眺められる。邦人間では、「香港櫻」に呼ばれてゐる少々櫻に似た花が、今、丁度満開である。海水浴場では、さすがに未だ、泳いでゐる者はなかつたけれど、既に海水着をつけて、マンドリンを奏でゐる連中もあつた。まるでセルロイドの人形そつくりの子供が、よちよちと砂濱を歩いてゐるのが可愛い。ドライブを終つて、更に、ケーブルカーで頂上に登る。此處ピーク山上にはピークホテルを始めまして數多の別荘が立ち並ぶ。ケーブルでなくとも自動車でも登る事が出来る。山上から見下した景色は又た格別。九龍を發した鐵道線路が、島を縫ひ、森を貫いて遠く後方の山の中に分け入る。廣東に通じてゐるんだそうだ。併し、現今は、途中に土匪が出没するので餘り利用されず、船で連絡してゐる由。眼下の香港棧橋から今、出帆しようとしてゐるのが其の連絡船で、眞白に塗られた小さいが、きれいな船である。港に浮ぶ數多の各國汽船の中で、郵船の天津丸が特に目立つのもうれしい。英國海軍根據地として、重油タンク、火藥倉庫、無線電信所等が、所々の島々を占領してゐる。

下山の時はケーブルを途中で捨て、植物園を見物してから港へ出る。連絡船で九龍に渡る。此の連絡船はスター會社が經營してゐるので船名には凡て何々スターと云ふ名が付いてゐる。Peninsular Hotel で一休みしてから、Royal Observatoryを訪ねる。此處は天文臺と云ふよりも測候所と云つた方が適當かも知れない。昔は天文觀測もやつてゐたのであるが、今は時間の觀測以外はやつてゐない由。立關の横に6吋位の赤道儀が入れられる圓い觀測室が、半壊れになつたまま、今は物置にでも使はれてゐるのらしい。子午儀を覗いた丈で引上げる。

晝食は陶々山莊で廣東料理を、晚餐は松原旅館でスキヤキを御馳走になる。今夜先生は、當地日本人會からの依頼で、青年會館で講演される事になつたので、松原旅館からは、先生御夫婦並びに井上氏と分れて、吾々若黨四名は市街見物に出かける。併し、今朝着いた許りで町の様子がまだわからないのよ、上陸する前、船の中で「夜は、うつかり一人歩きはあぶない」等とおきかされて來てゐるので、何處へ行くにも四人ともくつつい

て歩く。だが、歩いて見るに、そんなにおそろしい町でもなさそうだ。それで、あこで船に歸つた時、話したら「上海の方が、もつこひざい。そりやあ嘘ぢやあない」つて事だ。其は扱ておき香港市街は、晝間、遠くから眺めた時は奇麗に思つたが、歩いて見るに、随分きたない支那人街が多いのにあきれる。

9時頃に九龍に渡る。船から見た香港の夜景は實に素的である。海岸の市街から、ピークの頂上まで、或は家の火、或は街燈の光り等、青や赤の燈火で島全體が覆はれ、恰かも大きな螢籠が浮き出した様である。此の螢籠の上を、自働車のヘッドライトが、うねうね曲りながら、頂上まで登つて行くのも面白く眺められる。景色に於て、香港の夜景は、世界三港の一と云はれるのも、成程尤な事であるに感心する。九龍では名前が氣に入つて、スター劇場でコメディーを見物したが、洒落がわからない。もつこ正直に白状するに、喋つてゐる事が、てんで解らない。可笑しくもないのに見物人が相好を崩して笑い出す顔を見てゐる方が、よつ程可笑しい位だ。

○ 飛び魚や海豚の群を驚かしながら船は南へ南へこ進んで行く。香港では、晩春か、初夏の氣候であつたのに、香港出帆翌日の3日には、朝から既に眞夏の氣候に早がはりしてつて、船員の甲板で働く者は、白服にヘルメットの扮装となつた。急に來た暑さなので、とてもやり切れない。扇風器を廻したつて、部屋の内では耐へられないので、甲板のテントの下に皆集まる。香港までの航海は曇天續きだつたのが、3日から好天氣となつたのも一つの理由かも知れない。天氣はよくなつたが風は強く、うねりは相變らず可成りある。日没時のグリーン・フラッシュを見やうに、随分注意したが、いつも、もう少し云ふ所で雲に邪魔されてふ。

船では毎日朝夕に正午に太陽の觀測をして、船の經緯度を測つてゐる。星の觀測はやつてゐないらしい。六分儀を借りて、吾々若輩連中は代り代り太陽の觀測をやつてみる。海上での觀測は生れて始めて。

○ 佛領印度支那の山々を遙か彼方に眺めて通り、5日の午後になつてから、即ち北緯10度附近から、浪はすっかり穏やかになつて、所謂無風帯に入つたのか、瀬戸内海よりも靜かだに云ひ度い。殊に6日の夕刻、空一面

が夕焼で眞紅となり、それが、油を流した様な海面に寫つて、自分以外の凡ての物、雲も、海も、船も紅に燃えてゐるのではないかこさへ見られた。

シンガポールに着く前々日(6日)であつた。正午、甲板に出て見るに、太陽は照つてゐるのに自分の影がない。煙突のも、マストのも影がない。無いのではないが、影は各々の足下に小さく蹲つてゐる。即ち、太陽が天頂近くに来た爲めであつて、此の時の太陽の天頂距離は僅かに1度程であつた。

○ 夜、甲板で空を仰ぐ。天頂より北側に、見馴れない星座がある。此れは妙だ。此の部分ならば、京都からは、見え過ぎる程よく見えてゐる筈であるのに、さう考へても、こんな星座は記憶にない。仕方がないので、あれが北極星で、あれが北斗でさ行くに、「しし」でなければならぬ。併し「しし」の形にはなんこしても、成つてゐない。で、よく見たら……、何あんのこつた。「しし」がひつくり返つてゐるのだ。今までは、頭が上で、右を向いた形だつたのが、今は、頭が下で、左を向いてゐる。馬鹿馬鹿しいやら、腹が立つやら。併し、こんなにまで、感じが全然違つて了ふことは、思ひもよらない事であつた。暫らくするに、「さそり」が眞東から登つて来る。今度は騙されない。ベ星、デ星、ピ星の3星が地平線ではない水平線に平行に並び、眞直、天頂に向つて登つて来るさまは實に壯觀である。北極星は日々に低く、弱くなり、遂に6日からは、水平線近くの横雲のため、見られなくなつた。北極星が見えない程、淋しく心細く感じる事はない。

併し南方には、カノプスを始めとして、「センタウル」の α 星、ベ星、愛らしい「南十字」など、憧れてゐた南天の星座が今や、續々として現はれて来る。シンガポールに着く前夜たる7日の晩、ボーイが来て、「先生が上でお呼びです」ご知らせて呉れる。いそいでボート・デッキに上るに、先生は「大マゼラン雲だ」ご南方を指示される。驚いて振りかへるに、銀河から飛び離れて、浮雲の様にぼつかりこ浮んだ姿が、雲の切れ間から現はれてゐる。今度の旅行では、太陽の位置の関係で、さても見る事が出来ないうだらうご諦らめてゐた此の大マゼラン雲を、只一夜ではあつたが眺める事が出来たので小躍りして喜こんだ。

○ 例に依つて、船の時計は日に遅らされて、3日に36分、4日に7分、5日に3分、6日に8分、7日に6分。結局、香港からは1時間、日本からは2時間遅れた時間を使ふ事になる。

浪靜かな水平線の彼方に、煙突ミマストのみ見せて、汽船が通る。シンガポールまで、あこ1日の行程となつた頃からは、常に幾雙かの汽船を見てゐた。或るものは煙突丈け見られ、或るものは船体全部を見せ、或るものは、只煙だけで其の存在を知る。此等凡ての船はシンガポールへ、又は、シンガポールから航海を續けてゐるものと思はれる。これを見て、その港が如何に繁榮してゐるかが想像される。

○ 常夏の國、新嘉坡。又た、恰かも人種博覽會場の如しと云はるゝ新嘉坡。吾等の船は、4月8日の早朝に此の港に入つた。

波止場に働くクリーを見るに、まつたく色が黒く、眼ばかり光つてゐる。而も、此の炎天下に、全然跣足である。日向に置かれた鐵板の上でも、平氣で歩いてゐるのには驚いた。

兎に角、素的に暑い。まるで風がないんだから、やり切れない。日光は無茶に強く、おまけに、白服が多いので、目映ゆくつて見てゐられない。野村商店の鈴木氏に出迎へられて、自動車で同店の在る Union Building へ向ふ。波止場が随分廣く、市街まで可成りの道程である。同店は Building の5階だに聞いたので、エレベーターの内で、「リマ」に云つたら、うまく通じて、5階で止めて呉れた。先づ馬來語の第1回の試験は成功したわけ。此處で、スマトラの農園の詳しい位置を、地圖の上で調べる。思つたより、月の影の中心に近いので大喜び。

鈴木氏の御案内で、ジョホールまでドライブする。自動車は60キロ前後の速さで走つてゐる。道の兩側の、椰子の實、無茶に背の高い木、ゴムの木の林、水中から生えてゐる木、パインアップルの畠等、南洋氣分の溢れた凡てのものが、偉い勢で後の方へすつ飛んで行く。自動車の運転手は馬來人だが、英語がわかり、日本語の單語も少し知つてゐる。日本の竹は「おほきい」が、新嘉坡の竹は「ちいさい」に、ハンドルそつちのけで、手眞似まじりに話し出すので、乗つてゐるものはひやひやしながら聞いてゐる。婦

人に出合ふこ、あれは「おくさん」だこ云ふ。小さな娘の子まで「おくさん」なので、こうこう噴き出す。

新嘉坡の島を北へ突つ切つて了つた所が海峡で、その狭い海峡を隔て、向側がジョホール王國である。面積は九州程の廣さあり、馬來半島の南端を占めてゐる。世界大戰以後、島と半島との間を埋立て、道路を作り、直接半島と連絡して了つた由。此の埋立道路の東方に英國海軍根據地がある。

ジョホールのお寺を見物する。なかなか贅澤な建築である。此處を引上げ様こしたら、夕立がやつて來た。否、南方島の方がさしやぶりで、海面にも降つてゐるのだが、此處までは來ない。やつこ降つて來たこ思つたら、二臺並んだ自働車の後側のにばらばらこ來た丈で濟んで了つた。それから、島へ引返へして、水源池を見る。まるで公園の様だ。只、少し狭い公園の眞ん中へ、思ひ切り大きな池を作つたこ思へばよい。一見、松に似た木が多い。併し傍に寄つて見ると、針狀の葉の一本一本は、丁度木賊の如く節がある。そこで吾吾は此を「木賊松」こ命名する事にする。次に植物園に行く。此處には放し飼の猿や栗鼠がゐて、森の中で遊んでゐる。最後に博物館を見物する。

中食はジョホールの Johore Hotel で洋食を、晚餐はカトン濱の迎陽館で日本料理の御馳走になる。迎陽館は海岸にあつて、家の下まで海水が來てゐるので實に涼しい。博物館から此處へ自動車を乗り着けて暫らくするこ、野村商店の方々が續々こ集つて來られた。

浴衣に着更へて浴場へ行く。浴槽は日本の据風呂である。やれ懐しいこ、うつかり手をつけて飛び上つた。熱いの熱くないのつて、まるで火傷をしそうだ。湯が多くて水を入れる餘裕もない。仕方がないので洗面器に取つて、微温めてから汗を拭いた。あこで聞いたら、此方では皆な浴のただで、入浴したら、あこが暑くつてやり切れないんだそうだ。「成程成程」こ感心する。

浴衣がけで疊の上に坐つて、二の膳付きにキリンビールの泡をながめてゐると、恰も、日本の何處かの避暑地に落ち付いた時の様な氣がする。打ち解けて色んな話が出る。鰐の肉はなかなかうまい、こか、それは昨夜始

めて食べた許りだのに、こか聞いてゐる内に、何處かで、ちつちつ・ちやつちやつ鳥の鳴聲見たいなのが聞こえる。あれは何ですかと尋ねたら、天井を指示して、「やもり」ですこの事。驚いて仰ぐと、居るは居るは、五六匹、天井や柱を這ひ廻つてゐる。初めは一寸氣味の悪いものであるが、皆は蠅取蜘蛛位ひにしか思つてゐない。

此處でも山本先生は、當地日本人會の希望で、基督教青年會館で講演をされる事になつたので、吾々は例に依つて自由行動となる。それで、野村商店の方に案内されて、活動寫眞を暫らく見物する。

翌9日は、觀測隊としての買物やら、私用の買物やらで、皆忙がしい。でも馬來語は、實用に役立つ程にはなかなか上達しない。船の出帆は午後4時である。私は用事が手間取つて、皆さんに随分待つて頂いたので、大いに恐縮した。

船は正4時出帆。愈々、目的地たるスマトラ島にも、最早や、明後日の早朝に着く迄となつた。

餘り長くなつたので、一先づ此の邊で打ち切り、日蝕中の有様等は、來月號で詳しく御傳へする事にしませう。少し前置の方が長くなつた様ですが、最初にお断りした様に單なる記行文のつもりなのでから……。

百濟助教授を迎ふ

本會創立時代からの熱心な會員百濟教猷理學士は去る五月末に京都帝國大學助教授に任ぜられ、天文學教室に於いて第一講座を擔任せられることとなつた。同氏は大正六年に東京大學を優等の成績で卒業せられ、其の後京都大學の大學院に入り、大正十年から暫くは東京天文臺の編曆部技師であつたが、數年後退職せられた。氏がテンベル彗星を發見されたのは此の大學院時代であつた。今回わが京都大學に來任せられたことは大學天文部のためにも、本會のためにも大に喜ぶべき事である。